

## 検証 万博の現在地

開幕まで 500 日を前に、読売新聞が表題について 26 日から連載している。これまで知らなかったことを中心に抜粋して紹介する。

大阪・関西万博会場の人工島・夢洲では、巨大な円が姿を現している。万博のシンボル、環状の大屋根（リング）だ。今年 6 月に木材の組み立てが始まり、3 割ほどが組み上がった。今月 30 日で 500 日。しかし、円の内側に配置される「万博の華」、海外パビリオンは 1 件も着工されていない。

70 年大阪万博では、カナダが海外勢第 1 号として開幕 622 日前に着工した。大阪・関西万博は 100 日以上遅れている計算だ。愛知万博は当初、小規模な博覧会として誘致を目指した経緯などから、日本側が全てのパビリオンを建設。着工は 03 年春で、開幕 2 年前とさらに余裕があった。

遅れの背景として指摘されるのが、協会内の縦割りだ。職員は、国や大阪府、大阪市、企業などから出向する約 690 人の寄り合い所帯。参加国の対応は国際局、会場整備や建築関係は整備局と分かれている。政府関係者は「国際局はスケジュールの厳しさを理解せず、参加国に強く言えなかった。整備局は理解していたが、国際局に伝えていなかった」と明かす。

この点は 11 月 11 日レポートでも指摘したように、7 日に私もメンバーである夢洲懇談会が万博協会と協議した時にも痛感した。専門部署から多くの担当者が参加したが、全体状況について説明できる担当者はいなかった。話題の大屋根の担当者は、今年 4 月に出向したようで、あまり経過を知らないようであった。与えられた「ミッション」（万博協会関係者がよく使う言葉だ）をこなすだけで、責任感ある回答が得られなかった。

10 月 20 日、万博協会事務総長の石毛博行は、会場建設費が 1850 億円から最大 2350 億円に増える見通しを公表した。直後に大阪市内で開いた記者会見で、2 回目となる増額の責任を問われた石毛は「責任というのは何をもっておっしゃるのか……」と苦笑いを浮かべた。過去の万博を振り返ると、2005 年の愛知万博の会場建設費も計画時の 1350 億円から最終的に 1464 億円に膨らんだが、追加の国民負担は生じなかった。約 110 億円の増額分はすべて民間で賄ったからだ。その大半は、企業が無償で建てた会場施設を含む「現物給付」だった。当時の事務総長を務めた中村利雄は「何度も企業を回り、協力をお願いした」と語る。

そもそも、大阪・関西万博を誘致する時点で試算された会場建設費の根拠が薄かったとの見方がある。17 年 9 月に BIE に提出した提案書には 1250 億円と盛り込んだ。金額は愛知万博の建築コストなどを参考に算出したという。しかし、当時の試算に関わった府市の関係者は「愛知万博の会場建設費（1350 億円）を下回らないと国が認めてくれない恐れがあった」とし、1350 億円を下回るのが前提だったと明かす。

(2023 年 11 月 29 日)